

# 3.11 震災における子どもたちの語り

## 作文における被災者の声のテキストマイニング

飯島 有紀恵

相模女子大学 人間社会学部人間心理学科 研究生

### 1 問題と目的

#### 1.1 はじめに

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、地震と津波さらには原子力発電所の人災とも言えるトラブルが重なる未曾有の震災であった。この震災は日本のみならず、世界中に大きな衝撃を与え、様々な問題を提議するきっかけとなったことは言うまでもない。

この震災では、福島第一原子力発電所の放射能漏れ被害の深刻さが取り分け大規模なものであったと言える。放射能漏れにより、故郷を奪われ避難せざるを得ない人も多く、この問題は復興の大きな足枷となっている。

放射能被害は今後何十年にもわたり私達の健康に害を及ぼし続けるものであるため、被害を受けた人々の身体的、精神的負担は大きい。その様な状況下で、心身ともに発達段階である子どもたちが、地震、津波、原発事故により受けた身体的、精神的ストレスはとりわけ大きなものであると言える。

そのため、本研究では震災における子どもたちの体験に着目した。子どもたちの体験そのものを作文に綴った作品は、子どもたちの心境および子どもたちが置かれている状況を把握するという点で重要な記録である。本研究では子どもたちの作文を通して、次の2点に着目する。

#### (1) 共有体験により形成される基本的自尊感情

第1に、近藤(2010)の他者との共有体験の繰り返しによって形成される基本的自尊感情に焦点をあて、子どもたちの被災体験に着目する。

基本的自尊感情とは、他者との比較から出てくるようなものではなく、「理由もなく絶対的、根源的な思いとして自分はこのままでよいのだと思える」感情である。近藤は、この感情を「乳幼児期からの親や親に代わる養育者からの絶対的な愛と、その後の他者との共有体験の繰り返しによって、形成されるもの」だと述べている(pp. 2-3)。共有体験を通して生じる、「自分の感じ方が隣にいる信頼できる友だちと同じだ」「自分の感じ方はこれでよいのだ」「自分はこれでよいのだ」「自分はここにいてよいのだ」という感情が基本的自尊感情を育てていると言える。

上記を踏まえ、東日本大震災という共有体験を通して、被災した子どもたちの他者との関わりと、心境の変化を基本的自尊感情の観点から着目する。

## (2) 震災における心的外傷後成長 (PTG)

第 2 に、震災により被災体験をした子どもたちが、どのようにその体験と向き合い、成長しているかという点を、宅 (2010) の心的外傷後成長 (以下 PTG) の観点から着目する。

PTG とは、「外傷的な体験，すなわち非常に困難な人生上の危機(災害や事故，病を患うこと，大切な人や家族の死など，人生を揺るがすようなさまざまなつらい出来事)，及びそれに引き続く苦しみの中から，心理的な成長が体験されることを示しており，結果のみならずプロセス全体を指すと」定義されている (Tedeschi & Calhoun, 2004 ; 宅, 2010 : p. 25)。

PTG で扱う外傷とは、「米国精神医学界刊行の診断体系 (DSM-IV による PTSD 診断基準 A) で定義されている外傷に限定されず，ストレスの高い出来事から，ライフイベント，危機的な出来事までさまざまな内容のものが含まれる。むしろ，客観的にどのような内容の出来事が体験されたかというよりは，主観として，その衝撃の強さがどのように体験されたかに重点が置かれている」点の特徴である (宅, 2010 : p. 25)。

また、PTG では外傷的な体験に直接関連する認知プロセスが重要となる。外傷的な体験直後は、ネガティブな認知プロセスである侵入的思考が優位となり、起きた出来事を常に考え続けるなど、さまざまな心理的・身体的症状が強くなることが多い。しかし、葛藤やもがきを通して、その体験を肯定的に意味づけようとしたり、何か意味をみいだそうとする前向きで建設的な意図的思考へ性質が変わることで、体験前の水準以上に成長する点が PTG の特徴である (宅, 2010 : pp. 25-26)。

また、近藤 (2012) の PTG 包括モデルをまとめると次のようになる。PTG への第 1 段階目は、外傷によって引き起こされた内面の変化に対して行うさまざまな挑戦である。それら挑戦は、嘆きの管理、信念と目標の確認、物語ることであり、これらが順調にできると沈黙考・反すうの段階へ進む。これは、体験自体や体験に伴って起こった心的変化の過程を書いたり話したりする自己開示と並行して行われ、無意識的かつ侵入的に行われる。その後、社会文化的な身近にある PTG モデルや、より広い範囲で見聞きするような社会的テーマ、一般的な理想をめざしたモデルを参照するようになり、意図的な反すうや体験の全体像の転換が行われ、最終的な PTG の段階へと進む (pp. 5-6)。

近藤 (2012) は同時に、子どもの PTG モデルは一般的な流れとは異なるとも述べている。「外傷体験をした際にそれを評価し沈黙考と反すうの段階に至るのは、大人の場合と同様であるが、一方で養育者の外傷体験後の反応 (Caregiver' s Post-trauma Responsiveness) が、その後の PTG までの過程に大きな影響を与えることとなる。つまり、養育者 (親) の穏やかな精神状態や、ふだんからの親子の良い関係、悲嘆やストレスに対する適切な対処などが、重要な要素となってくる」と述べ、「その後の過程では、その子自身が持っているさまざまな能力 (Competence)、つまり問題に対処したり乗り越えたりする力や、自己効力感、さらには人間関係の調整力、未来への期待や希望を持てるかなどが最終的には重要になってくる」と付け加えている (pp. 6-7)。

上記を踏まえ、被災体験をした子どもたちと身近な他者との関係および、子どもたちの

PTGに着目する。

## 1.2 研究対象として収集した東日本大震災に関わる子どもの作文文献

以下の4冊を研究対象とした。

(1) Create Media (編, 2012) 『子どもたちの3.11：東日本大震災を忘れない』学事出版。

本書は、東日本大震災で被災した岩手県、宮城県、福島県、茨城県の10歳から19歳の44名の子どもたちが書いた被災体験記を集めたものである。それぞれの県ごとに子どもたちの被災体験記がまとめられており、被災地の写真も掲載されている。

(2) 森健(2012) 『つなみ：被災地の子どもたちの作文集 完全版』文藝春秋。

本書は、被災体験をした宮城県、岩手県、福島県の保育園児から高校生までの子どもたちの被災体験記を集めた作文集である。ジャーナリストである森健氏が避難所を回り、直接子どもたちや保護者に依頼し、集めた作文である。集まった作文は80本以上であり、震災直後の2011年4月から5月にかけて書かれたものである。中には子どもたちが描いた絵や、手書きの文章も掲載されている。

尚、本書は森健(2011) 『八月臨時増刊号 つなみ：被災地のこども80人の作文集』文藝春秋に福島県の子どもたちの作文を付け加えたものである。この作文は震災から1年が経過した後に書かれたものである。福島県の子どもたちからは30本の作文が寄せられた。

(3) 森健(2011) 『「つなみ」の子どもたち：作文に書かれなかった物語』文藝春秋。

本書は、震災直後から継続的に取材を行っている森健氏が『つなみ：被災地のこども80人の作文集』にて、作文を提供した10組の家族のその後の半年間に焦点を当てた取材記録である。本文には、『つなみ：被災地の子どもたちの作文集』(2012)と重複するが、子どもたちの作文も掲載されている。

(4) 鎌田實監修 ふくしま子ども未来プロジェクト編集(2012) 『はやく、家にかえりたい。：福島の子供たちが思う いのち・かぞく・みらい』合同出版。

本書は、震災当時に福島県に住んでいた小学3年生から高校3年生までの子どもたちの心境が作文で綴られている。震災時の恐怖や、原発事故により住み慣れた家から避難せざるを得ない心境が綴られている。

## 1.3 仮説

筆者は先行研究を踏まえた上で、本研究における仮説を以下の2つ立てた。

### 仮説1：共有体験による基本的自尊感情の高まり

震災という共有体験を通して、身近な人々や他者との関係を再確認すると共に、自身の基盤とも言える基本的自尊感情が育まれる。

### 仮説2：他者との関わりと心的外傷後成長(PTG)

信頼できる家族関係や他者関係のもとで、震災経験を受容し、自己開示できればPTGが期待できる。

## 2. 目的

本研究の目的は、東日本大震災を経験した子どもたちの作文から、子どもたちの語りの

特徴を明らかにし、他者との関わりを通して基本的自尊感情や PTG の可能性を明らかにすることである。

### 3. 方法

#### 3.1 分析対象：分析の対象とした4冊とその理由

分析対象の可能性のある書籍として、以下の単行本を収集し、活字になっている作文のみを研究対象の可能性のあるものとして抽出した。

森(2012)からは、活字になっている85編の作文を分析の対象とした。森(2011)には、10編の作文が活字化されていたが、森(2012)と重複が6件あったので、重複のない4編を分析の対象とした。Create Media(2012)からは活字になっている44編の作文、鎌田(2012)からは活字になっている36編の作文を分析対象とした。

以上、活字になっている169編の作文が研究対象として相応しいかどうかを吟味した。尚、書いた時点での書き手の学齢による比較を行うために、作文の筆者を小学生低学年(1-3年生)、小学校高学年(4-6年生)、中学生、高校生の4つに分類した。その基準は、年齢および本文中の記述が根拠になっている。

幼稚園児1人と、高校卒業後に文章を書いたと思われる5人と、18歳で学校の記述がない2人の合計8人を分析対象から除外した。結局、169編のうち、小学校、中学校、高校に在学していることが明らかな161編を分析の対象とした。

#### 3.2 分析方法

これら被災体験をもつ子どもたちの語りをテキスト化し、Text Mining Studio Ver.4.1により、テキストマイニングの手法を用いて内容語の分析をおこなった。語りのデータは書籍の構成に従い、各作文の語りを1段落、1行として入力した。

分析は、テキストの基本統計量、単語頻度解析、ことばネットワーク、対応バブル分析の順に行った。尚、分析を行う際に学齢別、県別、性別、津波・原発被害の有無に属性を分け、それぞれの分析を行った。

#### 3.3 倫理的配慮

すでに公表され、市販されている書籍の内容を用いた分析であるため、倫理的配慮は著作権に配慮する他は特に必要がない。

### 4. 結果

#### 4.1 基本情報

表1は東日本大震災後に小学生、中学生、高校生が書いた作文の基本情報である。総行数は分析対象作文の総数を表しており、161編であった。一人当たりの作文の文字数を表す平均行長は601.9文字であった。総文数は6052文で、平均文長は16文字であった。内容語の延べ単語数は39415で、単語種別数6465だった。タイプ・トークン比は0.164と比較的低く、文中に同じ単語が繰り返し出現する傾向があることが明らかになった。これは、

表1 基本情報

項目	値
1 ▶ 総行数	161
2 平均行長(文字数)	601.9
3 総文数	6052
4 平均文長(文字数)	16
5 延べ単語数	39415
6 単語種別数	6465

一人当たりの作文が比較的長文であったのと、震災という共通した話題をテーマに書いていることから、文中に同じ単語が繰り返し出現したと考えられる。

#### 4.2 単語頻度解析

子どもたちが記述した作文161編において、出現回数の多い上位20位の単語は表2の通りである。最も頻度が高かったのは「家」であり、125名が述べていた。続いて「いる」に関して122名が述べており、「人」に関しては121名が述べていた。

表2 単語頻度解析 (人数)

単語	品詞	頻度
1 ▶ 家	名詞	125
2 いる	動詞	122
3 人	名詞	121
4 地震	名詞	119
5 学校	名詞	110
6 津波	名詞	105
7 行く	動詞	99
8 見る	動詞	95
9 来る	動詞	90
10 出る	動詞	80
11 自分	名詞	76
12 帰る	動詞	75
13 車	名詞	74
14 生活	名詞	71
15 家族	名詞	70
16 避難	名詞	69
17 夜	名詞	69
18 怖い	形容	67
19 泣く	動詞	65
20 嬉し	形容	64
21 思う	動詞	64

最も頻度の高かった「家」は、被災を受けた家の状況、津波で家や人が流されていく光景、避難先から家に戻りたい様子などを説明する際に用いられていた。

次に頻度の高かった「いる」は、震災時にいた場所、避難時にいた場所、家族、友人など周りにいる人々の状況、状態を表す際に用いられていた。作文より、震災が起きた3月11日は卒業式の時期であり、通常授業が行われていた学校は少なかったと推察される。そのため、分析対象者の子どもたちは震災時に学校もしくは家にいたケースが多いことが明らかとなった。

次に頻度の高かった「人」は、震災時や避難先での人の様子、助けを求めている人や、援助してくれる人の様子などを説明する際に用いられていることが明らかになった。

##### 4.2.1 「大切」「一緒」に焦点を当てた単語頻度解析

表3-1 「大切」(回数)

単語	品詞	頻度
1 ▶ 大切	名詞	57
2 大切さ	名詞	14
3 大切+?	名詞	3

表3-2 「一緒」(回数)

単語	品詞	頻度
1 ▶ 一緒	名詞	79

「大切」、「一緒」という表現に着目し単語頻度解析を行ったところ、表 3-1、表 3-2 の様な結果となり、161 編の作文において「大切」は 74 回、「一緒」は 79 回使用されていることが明らかになった。「大切+?」は「どんなに大切なのか分かりました。」「もっと他に大切なことがある」「どれだけ大切なのかを知りました。」という表現だった。他にも、「つなみのせいで大切なものもながされた」、「協力することの大切さ」、「一日一日を大切にすごしたい」、「家族の大切さ」、「命の大切さ」、「仲間のきずなの大切さ」、「命の重大さ、人を思いやること大切さ」などを表現する際に用いられていた。

「一緒」は、「物はなくなっても家族が皆生きてこうして一緒にいられることが、私にとって何より大切」、「一緒に避難して無事」、「友達も一緒に寝泊りしていたので、とても心強かった」など、震災時や避難先で他者と共に行動していた際の状況を表す際にも用いられていた。

上記の結果から、子どもたちは震災を通して改めて命の大切さや、他者とのつながりを実感していたことが明らかになった。

#### 4.2.2 「感謝」「ありがとう」「嬉しい」「幸せ」に焦点を当てた単語頻度分析

表 4-1 「感謝」(回数)

	単語	品詞	頻度
1	▶ 感謝	名詞	46
2	感謝+ない	名詞	3
3	感謝+したい	名詞	1

表 4-2 「ありがとう」(回数)

	単語	品詞	頻度
1	▶ ありがとう	感動詞	34

表 4-3 「嬉しい」(回数)

	単語	品詞	頻度
1	▶ 嬉しい	形容詞	81
2	嬉しい+すぎる	形容詞	1
3	嬉しい+ない	形容詞	1

表 4-4 「幸せ」(回数)

	単語	品詞	頻度
1	▶ 幸せ	名詞	24
2	幸せ+?	名詞	2
3	幸せ+したい	名詞	1

「感謝」、「ありがとう」という表現に着目し単語頻度解析を行ったところ、表 4-1、表 4-2 のような結果となり、161 編の作文において「感謝」は 50 回、「ありがとう」は 34 回使用されていることが明らかになった。「感謝+ない」は、すべて「感謝してもしきれない」という表現であった。自衛隊やボランティアなど、救助や支援をしてくれた人々への感謝や、「野球ができる事に改めて感謝」、「あたり前の生活ができることに感謝」などの表現をする際に用いられていた。

「ありがとう」も「感謝」同様に、救助や支援をしてくれた人々に対して述べられていた。また、震災で犠牲になった人に向けられたメッセージで用いられていたり、震災当日に迎えに来てくれた親に向けて述べられているケースもあった。

さらに、「嬉しい」、「幸せ」という表現に着目し単語頻度解析を行ったところ、表 4-3、表 4-4 のような結果となり、161 編の作文において「嬉しい」は「うれしくない」という表

現を除く 82 回、「幸せ」は 27 回使用されていることが明らかになった。「幸せ+?」はすべて「どんなに幸せなことか」という表現であり、ポジティブな意味合いを示す表現だった。

久しぶりに温かい食事をする喜びや、家族や友人との再会、水道から水が出る喜び、学校で勉強できる喜びなど、震災前はあたり前だ感じていた日常に対する幸せを表現する際に用いられていた。

### 4.3 ことばネットワーク

複数のことばからなる意味的なかたまりを分析することで、子どもたちの作文でどのようなことが話題になっているかを明らかにした。図 1 より、子どもたちの作文において「家」「学校」「津波」「地震」「人」の 5 つに関する話題が多く語られていたことが明らかになった。「生活」が「学校」に関する話題のまとまりに出現し、「家」のまとまりに出現していないのは、避難先が学校となるケースが多く、学校が生活の基盤となっていたケースが多いためであると推察される。被災体験をした子どもたちは家族以外の他者とも生活を共にする機会があったと言える。

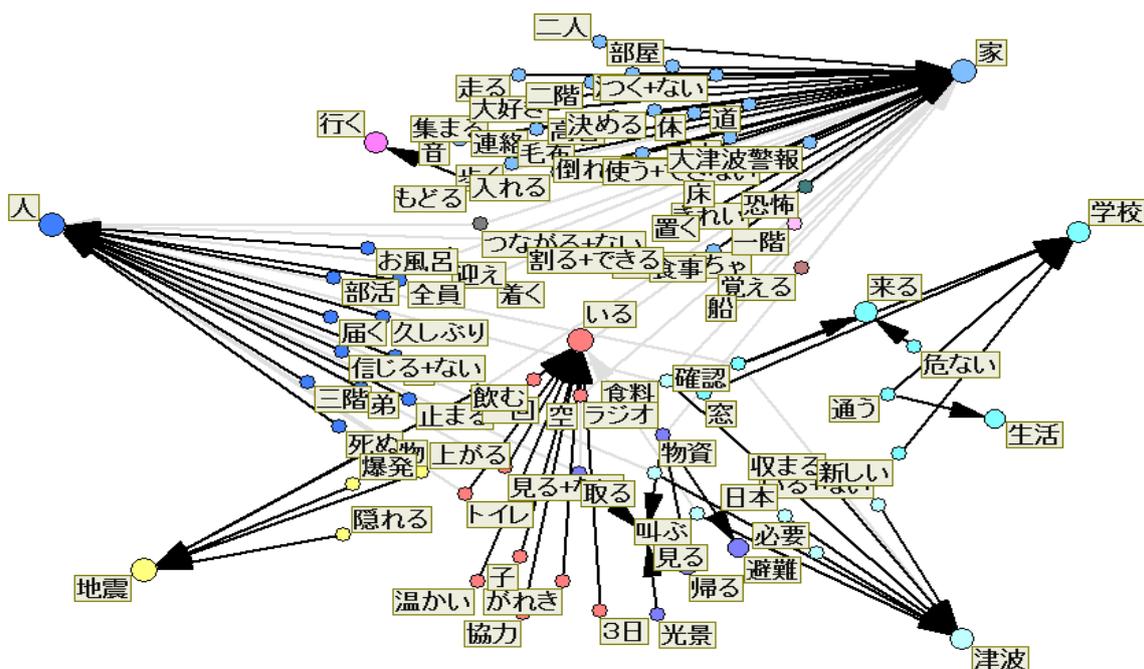


図 1 子どもたちの作文で語られている話題

### 4.4 対応バブル分析

被災体験をした子どもたちの被害状況を津波・原発被害の有無に分け、対応バブル分析を行った結果、図 2 の様になった。

津波被害が有り、原発被害が無い群は、「この震災を忘れたくない」、「この震災のことを伝えていきたい」ということを述べていることが明らかになった。

さらに、この分析において着目したい点は、津波被害が無く、原発被害が有る群と、津波・原発被害が共に有る郡の特徴である。両群ともに、地元や家に帰りたい思いや、「もと

の生活にもどりたい」、「早くもとのような町にもどってほしい」という思いを述べていることが明らかになった。また、原発被害のため避難生活が続ける中、離れ離れになった「友だちに会いたい」、「遊びたい」という思いも述べられていた。

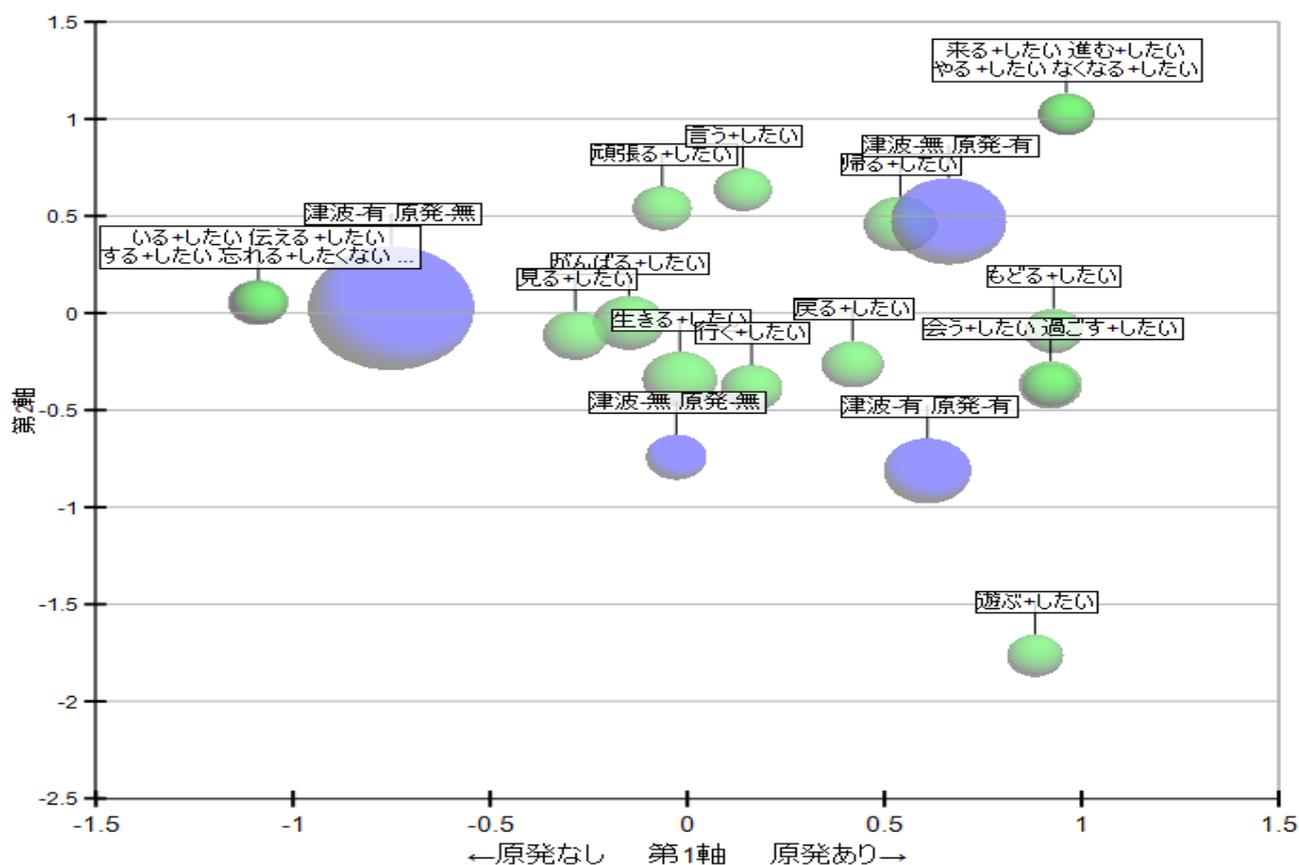


図2 津波・原発被害の有無における対応バブル分析

## 5. 考察

### 5.1 結果の概要

単語頻度解析では「家」「いる」「人」、ことばネットワークでは「家」「学校」「津波」「地震」「人」が上位に抽出されており、津波で家や人が流れてくる様子や、戸惑う人々、避難先での様子などが詳細に表現されていることが明らかになった。

また、「大切」という単語に着目した単語頻度解析から、161編中74回の頻度で「大切」という単語が使用されていることが明らかになり、「命の大切さ」「家族の大切さ」「仲間のきずなの大切さ」などを改めて実感していることが明らかになった。上記より、被災体験を通して命の大切さを改めて実感し、家族や仲間との絆を再確認していたことが明らかになった。

さらに、「感謝」、「ありがとう」に着目した単語頻度解析を行ったところ、161編中84回の頻度で使用されていることが明らかになり、「震災後に出会ったすべてのみなさんに感謝」、「命あることに感謝」、「自衛隊の人たちにほんとうに感謝」など、助けに対

して感謝する気持ちや、「命」や「当たり前の日常」に感謝する気持ちが表現されていることが明らかになった。「嬉しい」や「幸せ」も同様に単語頻度解析を行ったところ、161編中「嬉しい」は82回、「幸せ」は27回使用されていることが明らかになり、「家族に会えてうれしかった」、「無事だったことがうれしかった」、「ふつうの生活がとても幸せ」、「小さな幸せに満ちた生活」など、震災前は当たり前だと感じていた日常に対して、改めて喜びや幸せを感じていたことが明らかになった。よって、過酷な状況においても感謝や、嬉しい、幸せなどのポジティブな意味合いを持つ感情が生じていることが明らかになった。

また、ことばネットワークの分析結果から、「生活」が「学校」に関する話題のまとまりに出現していることが明らかになり、避難先の学校が生活の基盤となっているケースが多いことが判明した。このことから、被災経験をした子どもたちは、震災を通して家族以外の他者との関わりも多かったと言える。

## 5.2 先行研究との比較

### 5.2.1 共有体験による基本的自尊感情の高まりについて

被災体験をした子どもたちは、震災発生時に一人であった場合でも、避難中や避難先で家族や友人、知人などと共に過ごしていたことが明らかになった。また、見ず知らずの人間同士でも助け合う愛他的行動が自然と発生しており、様々な人と人とのつながりの中で震災という共有体験をしていたことが明らかになった。

森（2011）は、東北の特徴的な人間関係について述べている。少子高齢化が話題になる昨今だが、東北では多くの親類と多くの子どもを持つ家庭が多い。祖父母と一緒に三世代で住む家庭も多く、親類縁者が近隣に住むことも多い。何世代にも渡り同じ土地で暮らし続けることも一般的であり、コミュニティの結束力も強い。ある子どもの父親たちは地元である志津川（宮城県）を「家族」と形容していた（p. 277）。つまり、東北の子どもたちは自身のことを気にかけてくれる存在が多い環境のもとで、成長していると言える。このことから、近藤（2010）の言う基本的自尊感情は高まりやすい環境であると言える。

震災においても、地域全体を「家族」と捉え、互いに助け合うという共有体験を通して、子どもたちの基本的自尊感情は更に育まれていると推察される。守ってくれる大人たちが側におり、安心できる環境があるからこそ、子どもたちは震災という過酷な状況にも立ち向かうことができると言える。

### 5.2.2 他者との関わりと心的外傷後成長（PTG）の関係性

未曾有の大震災により、子どもたちが受けた精神的、身体的衝撃は言うまでもない。しかし、上記で述べたように、子どもたちは守ってくれる大人たちが側にいる安心できる環境で、震災によって引き起こされた内面の変化と対峙することが出来たと言える。

また、被災体験を通して命の大切さや、家族や仲間との絆、当たり前の日常に対する感謝、支援に対する感謝などのポジティブな意味合いを持つ感情も感じており、これらは前向きで建設的な意図的思考に通ずる面があると言える。

さらに、被災体験を作文という形で語ることに大きな意味があると言える。この作文はすべて、強制ではなく子どもたちの意志により書かれたものである。自身の心の内を文章で表現し、他者に伝えるという自己開示はPTGのプロセスでも重要である。

見守ってくれる大人がいる環境下で、自身の体験や感情をオープンに表出する経験は、回復および成長に際して重要なプロセスであると言える。その経験を積み重ねることでPTGへとつながると推察される。

上記に加え、筆者はPTGへと進む過程で子ども同士の間関係も重要になると考えている。共に遊び、共に語り、同じ時間や感情を共有し、共感することがPTGを促進する要因の1つになると推察するからだ。子どもだからこそ感じる視点を共有できる仲間は子どもにとって重要であると言える。

上記で述べたように、結束の強いコミュニティにおける家族のような人間関係や、友だちとの関係は、子どもたちの成長にとって欠かすことができない存在である。原発被害などで、家族、コミュニティ、友だちと離れ離れに避難せざるを得ない子どもたちにとって、安心でき、共感できる人間関係を築くことが重要であり、それらが更なる成長をもたらすと言えよう。

## 6. おわりに

震災から1年と8ヶ月が経とうとしている。今も尚、原発事故は収束の目処がたっていない。復興作業も放射能被害によりスムーズに進んでいないのが現状である。そのため未だに、家族や友人と離れ離れの生活をせざるを得ない子どもたちもたくさんいる。しかし、森(2011)が述べているように、どの家庭の中心にも子どもの笑顔があり、子どもの前を向く力が家族の救いとなっている事実は変わらない(p.279)。その子どもたちの笑顔と前を向く姿勢が、私たちにたくさんの希望の光りをもたらしてくれている。

## 7. 謝辞

学生研究奨励賞の原稿作成にあたり、Text Mining Studioを使用させていただきました数理システム様に感謝いたします。

また、ご多忙の中、他大学の研究生にも関わらず受け入れて下さり、指導して下さいました和光大学の伊藤武彦教授に心より感謝いたします。

最後に、本研究に使用させて頂いた作文の作者である子どもたち、そして全ての子どもたちに心から感謝します。

## 8. 文献

服部兼敏(2010)『テキストマイニングで広がる看護の世界:Text Mining Studioを使いこなす』ナカニシヤ出版。

近藤卓(2010)『自尊感情と共有体験の心理学—理論・測定・実践』金子書房。

近藤卓(編,2012)『PTG 心的外傷後成長:トラウマを超えて』金子書房。

森健(2011)『「つなみ」の子どもたち:作文に書かれなかった物語』文藝春秋。

宅香菜子(2010)『外傷後成長に関する研究』風間書房。